

社会のお役に立つ ケータイ もっと便利に簡単に

携帯電話は、1979年に自動車電話として生まれてからまだ四半世紀しかたちませんが、その間にめざましい進化を遂げてきました。爆発的に普及が加速したのは阪神・淡路大震災のあたりからでしょう。回線が混んで固定電話がなかなかつながらなくなる状況のなかで携帯電話の有用性が見直され、今では関西全体で1,400万契約と、赤ちゃんも含めた全人口の約3分の2の人々が携帯電話をもっている計算になります。

携帯電話は、もはや単なる「持ち運びできる電話機」ではありません。音声の時代からデータ通信の時代に移り、いまや通話だけでなく文字や画像の送受信、インターネットへのアクセスが可能になり、さらにはカメラやテレビ、ゲームに電卓、歩数計、防犯ブザーなど通信以外の多彩な機能が付加されるようになりました。最近では「おサイフケータイ」といって、買い物時の支払いやマンションのカギ代わりとしても使える機種が出ています。来年をめどに電車の切符としても使えるモバイルICOCAという形のサービスも始まり、利用範囲はますます広がります。ユビキタス社会という言葉は「いつでも・どこでも・誰とでも」通信できることを意味しますが、私はそれに「何でも」を付け加えています。携帯電話はいまや電話機を超えた「ケータイ」として、個人の利用のみならず、生活やビジネス上のシステムに組み込まれ、さまざまなシーンでお役に立つ存在になっています。

例えば大阪の池田市では、例の小学校児童殺傷事件の後、なんとか地域の強力な防犯体制を築くことができなかつたということで、「ANS INメールシステム」というケータイを使ったシステムをつくりました。不審な動きに気づいた人が市役所の危機管理課に電話で伝え、その情報をサーバ経由で警察や消防などの公的機関や、市民など事前登録者にメールで配信します。昨



有村 正意氏

Masaaki Arimura

NTTドコモ関西社長

年、このシステムを使った迅速な対応によって子どもの連れ去り事件を未然に防ぐことができたことで、現在、あちこちの自治体から引き合いがきています。そのほかビジネス面でも、例えばある運送会社は保冷車の温度管理にケータイを活用して業務の効率化に効果を上げるなど、さまざまにご活用いただいています。

われわれとしても、ケータイが今後さらに社会のお役に立つ道具となるよう、機能の多様化や高度化、あるいはセキュリティ対策に取り組んでいくつもりです。と同時に、ケータイは道具であって主役ではありません。大切なのは私たち人間がこれを使いこなすことから、多機能であっても決して操作が難しくならないよう、使いやすさも追求したいと思っています。「操作が難しいのは技術が未熟だからだ」と私は社内よく言っています。理想は人が普通に話すように、自然に手を動かすように、楽に操作できることです。

来年度から番号ポータビリティが導入されると、各社のサービス競争も激しくなるでしょう。特に関西はたいへん厳しい市場です。他地域に比べてドコモのシェアが低いのも、関西のお客様がブランドだけでなく、価格やサービス内容といった実質的な価値を重視されるからです。また、iモードが関西から先に利用が進んだように、新しいもの好きという特徴もあります。「厳しいけれども、新しいものは好き」。そうした市場で仕事をするのは、たいへんやりがいのあることだと思っています。

談